

モテない童貞おやじのヨシオの元に現れた
ブラなし下着姿の少女天使
異世界からやって来た彼女は童貞のヨシオにたっぷり
エッチをプレゼント

ヨシオはモテない。

とにかくモテない。

絶望的にモテない。

「ふああああああ！！」

カーテンからこぼれる朝日の中、上半身を起こして伸びをするもこの日することは特に決まっていない。

要は暇人である。

フラフラしてばかりの、しかも不細工のダメ男なのである。

しかし男というものはどこまでも罪深い生き物。

どんなにダメでも下半身だけは生殖本能を持っているのだ。

ヨシオの子孫を残すことに一体どんなメリットが……？

……とあまり卑下しすぎるのは止めよう、ヨシオも生きているのだ。

……しかし、29歳といい年のヨシオだが一人前に性欲だけはバリバリ。

朝立ちも日常茶飯事だ。

しかし、相手がないという絶望的事実がヨシオの現実を覆っている。

一丁前に戦闘態勢にはなるも、それを入れる穴というものがどこを探してもありはしないのである。

もちろん言い寄っても振られてばかり。

鈍感で図太さマックスのヨシオも、その悩みには深刻に苛まれていた。

自分の欲望や期待とは裏腹の寂しい現実。

「はぁ・・・」

と落胆のため息を漏らす時もあるれば、

「うぐおおおおああおおおおああああ！！」

と発狂ばりのうめき声を、今日のように上げることもあるのである。

いつもこんな調子だ。

怠け者な方ではあるが、かわいそうと言えばかわいそうなヨシオ。

しかしこの日は、まるで地の底から吹き出すようなうめき声を上げたことがどこかに通じたのか、驚くべき出来事が起きた。

何者かが天井をかすめてゆっくりとヨシオのベッドの上に降りてきたのである。

フワフワと舞い降りたその人物は、半透明の状態で寝かせたままのヨシオの足の上に跨って着地し、そして半透明から物体に変わった。

「うわああああああああ！！な、何いい！！」

まるで普段出す声とは別人のような甲高い声を上げてヨシオが驚くも、そ

の声を遮るように更に細く高い声でその人物は言った。

「うるさーっーいっっ！！」

これ以上は物理的にはないくらい全開で瞳を開けて驚くヨシオにその人物は続けた。

「もおおっっ！！困ってるのはあたしの方なんだからねっっ！！あなたの寂しさがひっじょおおーっに不愉快だったんだから！！」

その人物は少女の姿をしていた。

服装はどういうわけか下着一枚。ブラはつけておらず、まだ膨らみかけて間もないといった感じの小さくて柔らかそうな乳房が丸見えだった。

「ほんとにっ！！あーなーたーのっっ！！あなたのせいなのっ！！」

ブンブンッ！と怒っている。

怒りすぎて目尻にうっすらと涙を浮かべながら、限りなく早口で少女は経緯の説明だか思いの丈だか分からないが、とにかくたくさんの言葉をヨシオにぶつけた。

“どうやら彼女はこの世界と同じ場所にありながら“異次元”であるためこの世界の住人達には見えず、音も聞こえず、決して行くことが出来ない世界からやってきて、だけど向こうからは特殊な魔法を使うことでこちらの世界をのぞき見したり行き来したりすることが出来るらしく、更にはその世界の住人の中の女性の多くは“陰”のオーラが漂うこちらの住人の男たちを無視できない性格を持っていて、少女の名前はリミカと言って、偶然見つけたヨシオが気になってそれ以来無視できなくなってしまっ……。

“

こんな感じの、ヨシオもよくこの状況下で理解できたなと思うような早口の説明を、怒涛のように少女……いやリミカは発した。

リミカは言い終えた後、肩で息をしている。

とにかくそんな感じで彼女は寂しいオーラ満載のヨシオを見つけ、放っておけなくなり、そしてついにしびれを切らしヨシオにこうして会いに来たというわけだ。

しかし、

ということは…………。

目的は……………。

「あたし、もうあなたが寂しそうなのをてるの耐えられないの！！あなたのためなんかじゃないわ！！あたしの！あたし自身のためなんだからね！！！」

そう言ってリミカは穿いていた下着の腰部に手をかけ、跨いだヨシオの上で腰を上げ、足を上げて脱ぎ捨てた。

ポイッ！！

丸まって投げ捨てた白いパンツが散らかった床の上にポトンッ落ちる。

少し中に死んだ虫が溜まっている、味気ない白い蛍光灯が蒸し暑い室内を照らす夏の日の午後8時のことである…………。

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと幸いです。